

第2回（仮称）後谷湿地再生検討分科会 概要

日時：2024年5月30日（木）15:00～17:00

参加者：13人（9人欠席）傍聴者なし

開催方法：ウェブ会議システム（ZOOM）

次第

1. あいさつ
2. 勉強会
 - (1) 元地権者への聞き取り結果と資料の共有（藤野勇馬）
 - (2) 後谷でのモニ1000調査結果について（福田真由子）
 - (3) 後谷（中池見湿地）のトンボ相（和田茂樹）
 - (4) 中池見湿地付近の鳥類と後谷の湿地再生（吉田一朗）
3. 議事
 - (1) 施工スケジュールの説明
 - (2) 分科会の名称について
 - (3) その他
4. 次回以降の日程と内容の確認

資料

- ・第2回分科会次第
- ・第2回分科会参加者名簿
- ・勉強会 PDF データ
- ・議事① 後谷分科会資料（鉄道・運輸機構）
- ・議事② 分科会の名称について

1. あいさつ

分科会会長藤野勇馬より、第2回分科会の次第について説明、出席者の紹介

2. 勉強会

元地権者への聞き取り結果と資料の共有（藤野）

- ・ 下流側の水田は基本的に水路からポンプアップで水を賄っていた。
- ・ そのほか、隣の田んぼから畦を通してしみ出す水を利用していた。
- ・ ホタルがたくさんおり、誇らしく思った。

- ・ 上流側の田んぼは勝屋谷からの水でまかない、水路で排水。
- ・ 一部は畑。車道ののり面よく崩れる
- ・ 法面を含め、盛土をきれいに撤去して掘り出したかつての景色をみてみたい。

(会員からの意見)

- ・ 元地権者の要望だと田んぼにするということになるが、今回の湿地再生は田んぼにこだわらない。元の構造をいかしたらということ。
- ・ 水田から水が抜けないようにする仕掛けが必要だと思った。傾斜がきつすぎる。どのくらいの傾斜か段差がが重要になるのではないか。田んぼじゃなければ傾斜はきつくない方がいいのでは。

後谷でのモニ 1000 調査結果について (福田)

- ・ 埋め立て前の後谷はヘイケボタルの生息地として好ましい環境だった
- ・ モニ 1000 の調査結果によると、2019 年ころまで比較的多数生息していたヘイケボタルが深山トンネルの工事開始以降大きく減少。
- ・ ゲンジボタルについては調査期間中大きな変化は見られなかった
- ・ 自然再生の一つの達成基準としてヘイケボタルの生息数が目安になる
- ・ 後谷の湿地でどこまでを目指し、どう維持・管理するのか？

後谷 (中池見湿地) のトンボ相 (和田)

- ・ 後谷のトンボ相は湿地の盆地部分と比べて独特。
- ・ 特に源流性トンボ類は深山トンネル開始以降、確認できておらず絶滅が心配される。
- ・ 源流性トンボ類は中池見湿地の多様性の象徴ともいえる。
- ・ 自然復元工事により生息環境が好転する種と特に影響を受けない種、生息環境が悪化する可能性がある種があり、特に水路からの取水などについては慎重に検討する必要がある。

(会員からの質問)

Q. 流水性トンボ類の生息には小川の水量はどの程度必要なのか？

和田:ニホンカワトンボの場合は植物の根際にいる状況が必要なので、川岸につかれる植物が水につかっている状況が必要

中池見湿地付近の鳥類と後谷の湿地再生 (吉田)

- ・ 中池見湿地はノジコにとって渡りの中継地でありそれがラムサール要件にもなっている。
- ・ 中池見ではこれまでに 18 目 54 科 185 種 (外来種 2 種を含む) の鳥が確認されている。

- ・ モニ 1000 で後谷の調査を行っている。種が多くなる時期は渡り時期で、特に再生湿地の上流側に鳥が集まっている
- ・ ノジコの捕獲数が工事前より減少。他の地域もへっているものの、減り方が大きい。新幹線の影響なのかは判断が難しい。
- ・ 再生湿地の上流部は鳥や哺乳類の水場。どんな湿地にするのかで利用する鳥も異なる。

3. 議事

(1) 施工スケジュールの説明(鉄道・運輸機構 岡崎)

- ・ 土木学会環境賞を受領した
- ・ 工事契約 2.3 週遅くなった。次回分科会で施工の話ができる。
- ・ 4 面の水田を復田予定。水路から水を取り込む。
- ・ 法面浸食防止のため、法面の植生工を行う。少し時間がかかるが、種子の吹付はしない。
- ・ 1 案ガードレイン(シートポリエチレンが残る)、2 案ワラゴモ。ワラゴモは肥料になる。機構では、2 案ワラゴモ最適。
- ・ ピン 1 案は金属で残る。2 案は自然素材
- ・ 湿地構造について 1 週間後に質問はほしい。その回答も合わせて第 3 回で議論。

(会員からの意見・質問)

- ・ 植生工で予備的実験できる余裕があるのかどうか。2 案の実績の説明をしてほしい。

機構：実験の時間はないので実績を調べる。

- ・ 子々孫々まで残るものなので、工事遅れてもいいのでちゃんとつくってほしい。必要な時には工事を止めて。イノシシによる掘り返しも多いので考えないといけない。機構さんとしてそのような対応できるか。

機構：都度確認しながら進め方もできる逆にありがたい。慎重に確認しながら、次年度になっても大丈夫なら拒むことはない。のり面の植生の待ち受け工法の事例はほとんどない。選択肢はあまりない。

- ・ きわめて土木的。湿地再生は終わりではない。しっかり作る所と湿地の利活用で分ける、バッファーはどう必要なのか。価値の一つでどの部分は 100 年設計なのか。利活用のことを考えて作成田んぼ、とってあとから湿地ならできるが、変えられる。

- ・ この植物植えたい、というのがあれば、種団子のようにして吹付もありだと思う。

機構：種を集めないといけないため。時間がないので難しいかと思うが一度考える。

- ・ どんな形の湿地にするかがはじめ。階段上の湿地、モウセンゴケの湿地、河川の後背地、

ため池の湿地など色々想定される。一般図と植生図についての1週間後までに意見。それぞれの湿地について生物にとってどうか意見出し議論を行うこととする。

(2) 分科会の名称について

- ・ 「おしゃたん」と「ヲジヤ谷」は別の地名であることが判明。漢字で「後谷」は住民には通称「おしゃたん/おっしゃたん」。連続性の断絶を避けるため、分科会の名称としては「うしろだに」を用いるが、今後は積極的に「おしゃたん/おっしゃたん」と呼ばれていたことを記載していく。
- ・ 分科会の名称は「後谷湿地再生検討分科会（うしろだにしっちさいせいけんとうぶんかかい）」とする。

4. 次回以降の日程と内容の確認

- ・ 第3回分科会は6月第2週以降に開催予定。後谷の将来像と維持管理についての具体的な議論を進める。また、今回提出された鉄道・運輸機構の資料についての質問と回答についても議題とする。